



TITLE:

アドワの敗戦とは?

AUTHOR(S):

瀧川, 規一

CITATION:

瀧川, 規一. アドワの敗戦とは?. 地球 1935, 24(4): 308-315

ISSUE DATE:

1935-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184487>

RIGHT:

アドワの敗戦とは？

瀧川 規一

伊太利エシオピアの問題は他國のこととは云ひながら今日では吾々にとつて一大關心事である。今日伊太利が遠征軍をエシオピアに送らんとするのはアドワの雪辱戦をやり往年の宿志であるアビシニアの征服にある。伊國の文豪ダモンチオはアフリカに遠征する一青年に書を寄せて「創痕今猶吾が肩にあり。アドワの耻づべき傷痕を今も猶肩に感ずる」と云つた。表面の理由はどうあらうとも往年の宿志である伊太利の大陸殖民政策を遂行せんとするに過ぎない。換言せば野蠻國は文明國の餌となれ、鼠は猫の餌となれと云ふに過ぎない。然し今日も猶感ずると云ふ傷痕を與へたアドワの敗戦はどうして起つたか。これを知りたい好奇心がある。

一八九五年アフリカに於ける伊軍の總司令官はバラチエリ大將 (General Baratieri) であつた。同年に將軍がアビシニア征服の意圖を抱いてマレブ (Mareb) 河を渡つた時に戦争は不可避であつた。時のエシオピアの皇帝メネリク (Menelik) はエリトリア (Eritrea) を失ふ覺悟をして居られた。一八八四年の英エ兩國間に調印されたヒュエット (Hewett) 協約に違反してゐたが皇帝はハマセン (Hamasen) 州をも取られる覺悟をして居られた。然しチグレ (Tigre) を割讓することはどうあつても承知されなかつた。そこで愈戦争となつた。戦争は伊太利の敗北となつた。その結果今日の伊太利の歐洲列國間に於ける位地が定つたのであると云つても過言で

はない。バラチエリ大將が渡つたマレブ河はそれが爲めに今日も依然としてエリトレアとの境界線となつてゐる。簡單に比較して云ふならば今日の總司令官デ・ボノ (de Bono) 大將がムソリニの命令によつてマレブ河を渡るや否や伊エ戦争の火蓋を切られるのは何人も疑はぬ處である。或はシーザのルビコン河を渡る話と好對照をなすに至るかも知れない。

一八九五年の秋までに既にバラチエリ大將はチグレの殆ど全部を統制し巧妙なる戰術を以てアドワ・マカレ (Makalle)・アム・ジ・アラチ (Amba Alagi) の地方を順次に占據し深く内地に侵入してゐた。然しこの時伊軍は軍資と兵力の補充を缺き、加之エリトレアの新領土内に混亂が起つた。皇帝メネリクは遂に奮起し、現皇帝の父に當るラス・マコンネン (Ras Makonnen) をして其領地のハラル (Harar) から伊軍を攻撃せしめた。偵がのバラチエリ將軍も孤立無援の状態となつた。十二月二日には伊軍はアム・バ・アラ

ヂに於て大敗し、十二月八日にはラス・マコンネンはマカレの伊軍要塞を包圍し一ヶ月後に陥落せしめた。バラチエリ將軍はアドワを放棄し、軍隊を纏めてマレブ河を再び渡つて退却し、アビシニアに於ける領土としてエンチスシオ (Enfiseio) とアヂグラット (Adigrat) のみを保持するに止めた。六ヶ月を費して獲得したものを二ヶ月で全部失つたのである。

バラチエリ將軍は援軍なく且つ軍資も豊かならずこの上戰役を續けることの愚なるを悟つてゐたが、國元の首相クリスピ (Crispi) が平和協定としては戰勝の場合と等しき條件で協定せんことを欲した。一方バラチエリ將軍は想像以上に陥つてゐた自己の權勢を政治的に回復せんと欲し次の二ヶ月は一方に平和條約の交渉をなし一方に戰備を整へた。

翌一八九六年の二月に羅馬に於ては秘かにバラチエリ將軍を免職せしめ、免職の報知が將軍の耳に入らぬやうに努めた。免職の三日後の二

月二十五日には首相クリスピは免職された將軍に宛てて「これ軍事的肺勞にして戦争にあらず軍隊の名譽を救ひ、伊王國の權益の爲めに如何なる犠牲をも拂ふ覺悟がある。」と打電した。電文の意味は戰の命令でなかつたが、電文を受取つた側では戰ふ命令としか受取れなかつた。將軍はエンチスシオに軍を集結し攻撃の機會を待たつた。

バラチエリが待機して日を送つてゐる間に皇帝メネリクは軍隊を動員した。流言蜚語が巧に流布されたがまた一般に信じられた。皇帝は殺ろされたとか、雷の爲めに打たれて啞者となつたとか、内亂鎮定に従事してゐるとか種々な流言が行はれた。その間に皇帝が許する限りの兵を集めて北に走つてゐた。而かも皇帝の動員は軍隊全部の動員ではなかつた。一部分はタナキル族(Tanakis)を監視する爲めに東北部に残留せしめ一部分は托鉢僧群に對抗し防禦する爲めに西部に留らしめた。アドワに於ては少くと

も十萬のライフル銃隊と十萬の軍隊扈從者とが居つた。十萬の軍隊扈從者は勿論軍人でなく所謂キャムプ・フォロア(Camp followers)であつて利權漁りの群であつた。彼等の動く狀態は進軍中の軍隊とは全く異り、民族移住の觀を呈した。これが雪崩の如く二つの道をとつて北に走つた。一は山腹の道を辿り一つは低地の道をとつて北に押し寄せ、バラチエリ將軍が攻撃の決心をなす以前にアドワに於けるラス・マコンネンの軍隊に加つて宿營した。

バラチエリが敵軍の到着を知つた時は既に遅くあつて援軍を得ることが出来なかつた。彼が得た情報も亦不充分なものであつた。敵軍は七萬以上に上らないと信じ、伊太利人は野蠻人を必ず征服すべきものであるとの夢の如き信念をもつてゐた。伊軍はこの時一萬四千のライフル銃隊を有し、而かもその一部分は土民軍であつた。軍需品に於ても伊軍は優れて居なかつた。エ軍は伊軍よりも多く軍需品をもつて居りライ

フル銃隊は短距離の射程に好適であつた。のみならずホチキス速射山砲を所有し、終日伊軍の砲兵隊を威壓した。エ軍人は悉く地勢をよく知り山岳丘陵を超えて動作するには伊軍よりも敏捷で巧妙であつた。加之に伊軍の行動に關しては充分なる情報を得て居つた。ラス・アルラ(Ras Alulla)と云ふ幹部將校はドカリ(Dogali)その他の多くの戰鬪に於て勝利を得た經驗を有し、所謂ゲリラ・ウオアフエア(Guerrilla warfare)と呼ばれて居る遊撃戰を指揮する天才であつた。

伊軍の優秀を過信せるバラチエリ將軍は伊軍のなし得る戰法は只奇襲あるのみと信じた。三月一日は日曜日であつて、アビシニア國教會の祭日であり、その日にはエ軍の一部の兵士はアクサム(Aksum)の聖都に參拜することを將軍は知つてゐた。この機會に乗ずるために二月二十九日(その年は閏年であつた)の夜に軍隊を進め出來得べくんばエンチシオから進發し十八哩の

アドワの收戰とは？

距離にあるアドワを三月一日の日曜の朝に奪取せんと決心した。この計畫に基いて諸般の畫策をなした。然るに二十九日には全日丘陵地帯一面に非常な暴風雨が起り土砂降りの雨となつたバラチエリは氣が氣でなかつた。進發を延期しなければならぬかと心配した。幸に夕方に空は晴れた。夕方の九時に軍隊は出發した。軍隊は三隊に別れ夫々指定の陣地を占めるために險阻なる山岳地帯を超えて進んだ。その時は既に日沒後であつて暗く、只月影が丘陵を照らし山峯の輪廓が切れ切れに黒く見えて居ただけであつた。

伊將軍の計畫は軍事専門家の判斷によれば相當に安全な計畫であつたが、計畫の成否は地形上の知識の精確さと、軍隊が其知識を嚴守するか否かに全く依つてゐた。伊軍の居るエンチシオの陣地と皇帝メネリクの軍隊の居るアドワとの間の十八哩の道程は道路險惡であり雜木林で蔽はれて居り加ふるに谿谷があり峻險なる岩壁

がある。道程の半以上は少し高い丘陵の列であり殊に三つの山は他の連山よりも高く屹立し通路を塞いで居る。伊將軍は軍隊を三つに別ちこの三つの山に別れて陣地を占める積りであつた。若しこの陣地を占據し得れば一線をなす高地からアドワの平原を見下ろし得る形勝の地を占めることになる。

三隊に別れて進軍した伊軍の右翼はダボルミダ(Dabornida)將軍に指揮され、左翼は土民軍であつてアルベルトネ(Albertone)將軍之を率ゐ、中央軍はアリモンチ(Arimondi)將軍の統率するところとなり豫備軍にエレナ(Elena)將軍が居た。總司令官のバラチエリは豫備軍と共に居た。右翼軍と中央軍の位置は進軍の始まる前に總司令官から發した略圖に明確に記載されてあつた。然し軍隊の出發したのは暗黒の夜であり不安内の土地であつた。左翼の軍隊に與へた命令書には留まる地點をチダネ・メレット(Chidane Meret)としてあつた。この地點は戰

略的に正確であつたがバラチエリ將軍が思つて居つたこの山は地圖の上にチダネ・メレットと書かれてゐたが實際はチダネ・メレットではなかつた。實際の山はアドワの方向で左側の方で數哩も尙遠くにあつた小丘であつた。斯る不精確な地圖をもつて二月二十九日の夜軍隊は進發したのである。

アルバトネの率ゆる左翼軍は他の軍隊よりも遙かに先んじて進み得、三月一日の朝非常に早く地圖上にチダネ・メレットと記された丘に到着したが、他の軍隊は影形も見えなかつた。左翼軍は指定の陣地に就き中央軍の到着を右手に待つてゐたが一向音沙汰がない。心配しながら待つてゐる間に度々使者を送り返へしたが使者は戻つて來なかつた。遂に土人の案内者によつてアルバトネ將軍は、今留つて居る地點はチダネ・メレットでないことを教へられたので大に狼狽した。その結果地圖による自身の判斷に従ふよりも寧ろ命令書の文字通りに従はんと決心し眞

實のチダネ・メレット山に進まんとした。軍隊が新目標に向つて進發したが未だ達せぬうちに朝の六時にアビシニア軍の攻撃をうけた。

ダボルミダ將軍の率ゆる右翼軍は暗夜に道を誤つて一山右に寄り過ぎたところに陣地をとり最初意圖されてゐた位地から隔つてゐた。其結果中央軍のアリモンチ將軍エレナ將軍が豫定のライオ(B.E.O)丘麓に達した時には左右の兩翼軍を見ることが出来なかつた。兩翼軍は略五哩も隔つてゐた。中央軍は施すべき方策を知らなかつた。山麓から頂上に登つて陣地をとることもせず只狭き山道にすくみ密集してゐた。全日伊軍の通信は全く通じなかつた。これが三月一日の朝即ち所謂アドワの日の朝の伊軍の状況であつた。

一方アビシニア軍は戦備を整へて待つてゐた。ラス・アルラは宗教の禮拜よりも寧ろ戦事に注意を拂ひ伊軍に對する疑を緩めなかつた。彼は伊軍陣地にスパイを放ち、二十九日の夜半

アドワの敗戦とは？

後間もなく伊軍の進發を知つて、急遽禮拜に出かけた軍人等をアクサムの聖都から召還し軍事工作をなす準備を整へた。アルバトネの左翼軍が友軍と分離し、アドワから明かに見えるチダネ・メレットの本當の山に現はれるや否やアビシニア軍は攻勢に移つた。密生せる雜木林の掩護物を利用してエ軍は迅速に肉迫した。エ軍は陣地から出で、谷間を越える間は暫くの間敵の砲火に曝されたが間もなくチダネ・メレットの斜面に隠れて益々肉迫した。

エ軍の或る部隊はアルバトネ將軍の陣地の上に攀ぢ登り砲火を上から釣瓶落しに浴びせかけた。他の部隊は伊軍の側面に忍び寄り完全に伊軍を包圍した。伊軍は數に於て劣り戦略に於てだし抜かれ、包圍されて援軍なく位置の不安があり如何ともすることが出来なかつた。この時のエ軍は恰も神話にあるジェーソン(Jason)が龍の齒を鋸で切りとつた時の如く大地から大軍が湧き出た如き有様であつた。伊太利軍人は勇

敢に戦つたが駄目であつた。土民軍は分裂して遁走しアルバトネ將軍は部下の將校と共に降伏を餘儀なくされた。その間右翼のダボルミダ軍は左翼軍よりも堅固な陣地にあつたが矢張り友軍から隔離し必死の戦鬪を續けた。中央軍豫備軍のアリモンデ將軍アレナ將軍は後陣にあつたが、前方から恐怖に襲はれて死物狂ひに逃げ歸る逃亡者の群に殺到されて意氣沮喪した。逃亡者等は友軍と接觸し得るまでに既に携帶の銃器を棄てて居た。

朝の十時までにラス・アルラは戦鬪が終結を告げてゐることを知り、矢張り戦鬪に主要な役割を實際になして居られた皇帝に、伊軍の通路を遮斷する爲めにエ軍の騎兵隊を全部派遣して貰へるかどうかを伺つた。皇帝は警戒の心から或は敵を憐む心からかラス・アルラの要求を斥けた。皇帝のこの拒絶は伊軍の全滅或は降伏を免れしめたことは事實である。然し伊軍の損害は非常なものであつた。左翼軍を片付けたエ

軍は残りの二隊に向つた。ダボルミダの右翼軍は終日戦ひ續けた。將軍自らは戦死した。

中央軍豫備軍は逃亡者の大群を見て意氣沮喪し且つ狭き谿谷に居る自己の不利なる位地を看取したが間もなくエ軍の爲めに敗られ混亂狀態に陥り列を亂して逃げた。

戰場に遺棄された伊軍の屍體八千餘、これに加ふるに土民軍の戦死者四千餘、キャムブ・フオロアの死體數千を算した。逃亡者は山間の通路や峠を超えるのに惱まされ、力盡き絶望した。歩兵の穿つてゐた重い長靴の爲めに行動の自由を缺いて居た。伊兵等は若し捕縛される時には四肢切斷されることを恐れた。追撃は終日續行され、日没に及んで皇帝メネリクは戰場を退かれた。エ軍の損害は比較的輕少であつたとは云へども、それでも戰場で仆れたものの五千人を算した。戰場は殆ど四十哩に亘つて屍體が蒔き散らされてゐた。一年後と雖もアドワ及び周圍の土地は葬られざる屍體の惡臭の爲めに人間の居

住を許さず住民の姿を見なかつたと云ふ。

以上は伊軍にとつて忘る可からざる敗戦の状況である。エ軍にとつては今日も誇りとする戦勝の記念である。第三者の觀察者にとつては六十年前以前と今日とは武器の性質を異にする。地形地理の峻険は今も昔も變らぬにしても、土地に關する知識と兵器とに於て非常な差異がある六十年前の戦勝が今日再び得られるとは限らないと憂ふ。この記事の掲載される頃にはエ軍には果して得意のグリラ・ウォアファを發揮する機會があるか否か矚目してこれ待つてゐるのである。

新著紹介

○教材解説世界新地誌（植民大陸篇）

櫻井靜著 大同館出版 定價三圓二十錢

植民大陸として濠洲・アフリカ・南北アメリカの四大大陸をのべてある、文章輕快誠に要領を得た参考書である、本書の特色は各都ごとに教授の心得をあげて注意すべき要點を漏れな

新著紹介

く記してあることである、勿論要點だから概ね二三行ではあるが、挿圖も亦簡單で効果的である。菊版四三四頁、下巻として歐亞大陸篇が出たならば、小中学校での手頃の参考書となるであらう。（藤田）

○地學寫眞

田中蕪著 古今書院 定價三圓五十錢

題して地學寫眞といふが、素人たると黑人たるを問はずいかに寫眞をとるべきかといふ機械と理論との説明である、さうして地理學者がその生きた材料としての寫眞を、天下いたる所に求むべき乗としての本書は、蓋し適切な時代への寄與といつて過言ではないであらう。四六倍版百八十二頁、説明も丁寧でわかりやすい。（藤田）

○カムチャツカ探檢旅行記

ベルグマン著 中垣虎兒郎譯 學藝社發行

昭和拾年八月 壹圓五十錢

スエーデンの自然科學者、ステン・ベルグマンの一九二〇—二二年間の探檢の内、スキー及び大樫による冬の旅行のみを記したもので、行文は外人によくあるくどい描寫もなくスラ／＼と書かれてゐる、むづかしい學名等もあり出て來ず氣樂に讀める。雪に覆はれたツンドラの景色程、單調のものは外に類もないやうに思はれるが、其處に住む土人の珍らしい風俗や樺犬・馴鹿の習性等を點描し、時々我々の憧れの火